

[第1回 これだけは知っておこう 留学／フィールドワークのリスクマネジメント]

フィールドワークと安全対策の問題点 ——大学院生以上の場合——

Fieldwork and Related Security Problems: Faculty–Graduate Scholars Nexus

椎野 若菜
SHIINO Wakana

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
Tokyo University of Foreign Studies, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA)

キーワード

フィールドワーク 性被害 自前の相談ネットワーク 調査者のジェンダー・セクシュアリティ

Keywords

Fieldwork; Sexual violence; Consultation network; Gender/Sexuality of researchers

Quadrante, No.24 (2022), pp.97–101.

目次

1. フィールドにおける安全対策
2. フィールドで実際に起こった性被害
3. 院生以上の海外でのフィールドワークのセクシュアリティの基本(文化人類学)
4. 防御策はあるのか?—幾重もの相談ネットワークを自らが構築
5. 行く側も、送り出す側も、リスク対処への意識を高める

筆者は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)に属し、社会人類学専門で、東アフリカをフィールドとする研究者である。社会-文化人類学は、現地でのフィールドワークを必須とする学問である。ほかにも地理学、考古学、動物学、生態学など、フィールドワークによる調査データ、現場における発見をもとに成り立っている学問は数多くある。私の属するAA研では歴史学、言語学の方々も現地における史料、聞き取りのためのフィールドワークを行っている。私自身は、1995年に初めて大学院生(修士課程)としてのフィールドワーク

をケニアで行ったが、その際に本シンポジウムの共催ともなっている日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター(ナイロビ学振)で、さまざまな分野のフィールド研究者に出会い、アフリカの歩き方を教わった、といまでも思う。若い時期のその経験は刺激的で、ナイロビ学振のような環境を身近につくれないものか、という思いもありフィールド研究者らと2012年にNPO法人としてFENICSを立ちあげた。分野横断的にフィールドワーカーをつなぐその活動で大事にしているのは、「フィールドワーク」という営為が、何事にも代えがたいすばらしい知的活動で、フィールドで得た情報や成果や方法を、分野を越えて共有することである。自分が生まれ育ち、慣れ親しんだ生態学的、社会文化的環境から離れて、ある一定の期間、異なる場所に行くこと、そこで学ぼうとすること—すなわち留学、フィールドワークという行為は、現地の文化、自然世界、自分について、自文化についても同時に考えることとなる自らの挑戦であり、そうしたすばらしい経験を得られるすべである。フィールドワークという現場では、想定外のこと



がしばしば生じ、とりわけ初心者の頃は失敗から学ぶことが大変多い。実際に経験しなければ学べないことも多くある。ただ、経験から学ばなくてよいこと、それが性被害によるものである。

1. フィールドにおける安全対策

FENICS では FENICS100 万人のフィールドワーカーシリーズ(全 15 巻)を古今書院より発行しており、そのうち第 9 巻『フィールドワークの安全対策』が本テーマに大きくかかわる巻である。過酷な自然環境にある対象がフィールド、自然とむきあうからこそ生じる危険、調査国における政変、日本にはない病気の予防など、フィールドワーカーとしての安全対策の心得は多岐にわたる。なかでもセクシュアリティに関する点で、本書のなかで飯嶋秀治氏が次のように言及している(飯嶋 2020)。アメリカでは、1987 年にアメリカ人類学会が、また 2014 年に社会医学、グローバルヘルスのギリアン・アイスらが (Ice et al.) がインターネットを用いてフィールドワーク中の危険に関するアンケートを行い、フィールドワーカーへの深刻な性暴力の一端を明らかにした。「666 人中 64% がフィールドでのセクハラなどを報告し、21% が望まぬ性的接触の報告をしているが、典型的被害者が女性なのに対して、典型的加害者は同大学や他大学の年長男性としているのに注意を払っておきたい」という指摘がある(飯嶋 2020: 116-117)。

さらに、2017 年以降広まった #Me Too 運動に触発される形で、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドの人類学系の組織 AAS/ASA/ASAANZ (Australian Anthropological Society/Association of Social Anthropologists of the UK and Commonwealth/Association of Social Anthropologists of Aotearoa/New Zealand) においてもフィールドワーカーの性被

害を防ぐため、学生および教育・研究機関向けの指南書や基本方針・行動計画のガイドラインを作成している。Me too Anthoro というウェブサイトも立ち上がった。

文化人類学では、調査者が被調査者を一方的に調査し表象する非対称な権力関係や、被調査者のプライバシー保護などといった倫理的問題は取り上げられてきた。しかし、フィールドの人びととラポールを築くなかで、女性や学生、若手研究者など、身体的・構造的に弱い立場に置かれやすいフィールドワーカーが直面する危険や問題、またそれらへの対処法は注目されてこなかった (Clark and Grant 2015)。

日本文化人類学会でもアンケートをとる予定はいまのところはなく、FENICS と協働して活動を始めた HiF (フィールドワークとハラスメント / Harassment in Fieldwork: HiF) が 2022 年の 1~2 月に実施した、「フィールドワークにおける性暴力・セクシュアルハラスメントに関する実態調査アンケート」に日本文化人類学会倫理委員会と男女共同参画・ダイバーシティ推進委員会も協力して広報を行った。HiF としては人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会(通称 GEAHSS)と一般社団法人男女共同参画学協会連絡会の後援を受け、学会図鑑に掲載された各学会に連絡し、実施したばかりである。

2. フィールドで実際に起こった性被害

HiF ではまず、問題や被害の実態把握を行うために、SAYNO! と共催でサロンや読書会を開催する傍ら、体験記を募集し、そのいくつかを HP 上で公開されている。そこから見えるのは、ある程度フィールドに慣れた頃に、被害が起きている事例がいくつかあることだ。

引用元:「フィールドワークとハラスメント」
HP 体験記

(<https://safefieldwork.live-on.net/category/story/>)

〈調査助手や協力者〉

：3年ほどの協力関係ののち、関係をせまられ、その調査地を去ることになった。
 ：現地のほうで勝手に結婚相手にすると決められており、これまでの関係性が壊れ調査ができなくなった。

〈受け入れ機関などの関係者〉

：地域研究関係者に知られる現地の妻子ある「親切的な」人が、急に襲ってきた。

〈調査国にいる／訪れる教員や研究関係者〉

：日本にいるときよりぐっと教員との身体的距離感が近くなった。ボディ・タッチなどが頻繁になされた。

フィールドで被害を受けた際、大学院生以上の場合、調査者としての自分と調査を行う現地の人との関係が悪くなることで、たとえば、次のような「恐れ」を覚えてしまう可能性がある。

①調査地、調査協力者を失ってしまうのではないか。すなわち、アカデミズムにおける自らのキャリアアップに大きく影響するのではないか、という恐怖である。さらに、②告発することで、現地の加害者の日常・人生を壊すことになるが、「はたしてそれでいいのか？」と悩んでしまう。また、多くの場合、調査者が③告発することで、加害者が権力者である場合はさまざまなチャンスを失い、自らのキャリアが断たれることになるのではないか。④異なる国、社会での出来事に関し、理解者が得られにくいのでは、という不安がある。

これまでに集まった体験記や、サロン開催にさいしての参加者の声からも、多くの女性研究者が、何かしらの性被害にあっていることが分

かる。20年以上経っても忘れられない経験があり、そうした経験に封をして現在に至っている。だがこのような声が多く聞かれるものの、「体験記」が多くは集まらないのも事実である。アカデミズムのなかで、誰が書いたかという特定化への恐怖もあると想像される。

3. 院生以上の海外でのフィールドワークのセキュリティの基本（文化人類学）

【村落】

現地の人々の日常生活の場で生活をさせていただき、村落での長期フィールドワークにおいて、調査者は「娘」「息子」など、家族の一員として住まわせてもらう方法をとる場合が多い。外部から入ってきたよそ者であっても擬制的な家族の一員となることで、社会的地位や呼称が定まり、何よりも受け入れ側が守ろうとしてくれることになる。村落では、村人もそれぞれ村社会における慣習的規範のもと、社会的地位があるため、逸脱行為に及ぶ確率は低い。だが「家族」から日常は守られている環境をつくったとしても、村外から訪問者が多く来るような、村において非日常の儀礼や祭宴が催されるときは、注意しなければならない。

また、女性調査者であれば調査助手は女性、であるほうが安全であるのは言うまでもない。調査内容によっては夜通し行われる儀礼などに参加、観察することもあるからだ。また、ジェンダー規範も伝統的で厳しいところが多いため、異性と共にいるよりも、同性同士のほうが問題につながらない。つまり、村人からどう「見られるか」ということである。異性との距離は注意して行動しなければ、自らに性被害を及ぼす危険性だけでなく、問題化されることで調査地の人々との関係が悪くなり、調査の継続が難しくなることもある(中川 2016)。忘れてはならないのは、自分がフィールドに入る、ということは、自分のジェンダー／セクシュアリティが、

現地の人々の社会、人間関係にも何かしら影響を及ぼすこと、それは調査そのもののデータの質にももちろん反映することである。これは、意識して行動する必要がある。

【都市】

言うまでもなく、人口も多く、匿名化が高く、伝統的な慣習のしほりや、年長者などの監視の目がうすい都市部は、外から来た者には危険度が増す。しかし、かならず地元の人を知る「治安の悪い危険地域」はあるので、情報を収集してから歩き始める。治安が悪い地域ではカバンをもたないほうがよく、なるべく現地の人と歩くのがよい。夕方以降は決して一人で外出せず、知り合い宅に泊まる。

以上は、海外旅行でも共通して言われることであろう。ここで付け加えたいのが、日本からのフィールドに訪ねてくる教員などとも「ある一定の距離」をとるようにすることだ。教員側は、学生や若手とのある一定の距離をとらねばならない。これは当事者同士の関係性の問題だけでなく、現地の人々（邦人を含む）がどう見ていくか、という視線があることを忘れてもいけない、ということでもある。

4. 防御策はあるのか？—幾重もの相談ネットワークを自らが構築

相談する窓口を現地と日本と双方に幾重ものネットワークを構築しておく必要がある。日本では、現地の状況に明るい専門家、フィールドワーク経験者（学内外）に知り合いをつくり、調査に行くまえには連絡をとっていく。日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターのように、現地で研究者が立ち寄り利用できる組織があれば、日本から現地に行くまえに、事前に一報をいれる。現地に着いてからは、日本での相談者に時々報告をいれる。無事に帰国した際には、両者に報告する。こうしたきめ細かなやり

とりが、もしもの緊急の際に、対応してもらえるネットワーク形成となるのである。

さきにもふれたように、調査地では、信頼していた人が異性の場合、それまでの関係が壊れてしまうことがある。そのため、ホームステイ先以外にも相談できる親しい関係をあらかじめ築いておく必要がある。現地では外国人の世話をすることがステイタスにもなることも多いため、自身の存在が現地社会でのコンフリクトの原因となる場合がある。

また、インターネットや電話がある程度の安定環境にある調査国の首都や地方都市に、いつも訪ね、甘えられる家庭や友人をもつことは、心身の安定のためにも重要なことだ。

5. 行く側も、送り出す側も、リスク対処への意識を高める

事が重大化するまえに、相談していれば防げることも、最小限に抑えられることも、ありうる。悩んでいる際に相談する相手がいる、というのは非常に重要なことだ。だが、急に生じる事柄が多いのも事実だ。そういう私自身も、フィールドにおいて、全身の力を振り絞って逃げたことがいまだ忘れられないが、「あの経験を防げたであろうか？」といえ、いま冷静に振り返っても難しいとしかいえない（椎野 2014）。残念ながら防御策といえることは、具体的な経験者による事例から、「もし似た状況に陥ったらどうするか？」というシミュレーションを逐一することが一つの方法である、ということくらいである。

自分の心身を傷つけてまで調査する必要はない。ときに調査を中断する勇気を持ち、教員たちもその状況を受け止め、その次をともに考える。健康であれば、次のチャンスが必ずあるはずだ。

自分が経験した「被害」を他の人に味わってほしくない、という思いから、語る人もでてきた。

告発することによって、少しずつ社会の空気が変わってきたことも事実である。# Me too 運動の波もあり、今回のシンポジウムでも SAYNO! が勇気を出して声に出せるようになってきたことを受け、意識改善、制度的改善の方向に関心のある方々とともに少しずつ進めたいと考えている。とりわけ、SAYNO! が発表した経験談からは、日本社会に色濃く残るジェンダー不平等観が、そのまま海外の閉ざされた日本人社会に移植されていることが明らかになった。海外調査に行ったにもかかわらず、海外で日本人から被害を受けるなど、決してあってはならない。日本社会全体のジェンダー・セクシュアリティの問題として立ち現れている。

東京外国語大学においては「TUFS 100 当番」が開設されている。学内で知らなかった方は、ぜひ頭の隅においておいていただきたい。

【参考文献】

- Clark, I., and Grant, A. 2015. Sexuality and Danger in the Field: Starting an Uncomfortable Conversation. *Journal of the Anthropological Society of Oxford Online* 8(2): 1–14.
- Ice, G. H. 2015. *Disasters in field research: preparing for and coping with unexpected events*, Rowman & Littlefield Publishers.
- 飯嶋秀治 2020 「人類学の安全教授と大学のガイドラインの間で」, 澤柿教伸・野中健一・椎野若菜編『フィールドワークの安全対策』(FENICS100 万人のフィールドワーカーシリーズ 9) 古今書院、pp.113–123.
- 椎野若菜 2014 「家族、友人、アシスタントとともに——フィールドワークという暮らし」, 椎野若菜・白石壮一郎編『フィールドに入る』(FENICS100 万人のフィールドワーカーシリーズ 1) 古今書院、pp.216–233.
- 中川千草 2016 「フィールドで『ヨメサン・ムスメ』となるためのスイッチ」, 椎野若菜・的場澄人編『女も男もフィールドへ』(FENICS100 万人のフィールドワーカーシリーズ 12) pp.16–28.

MeTooAnthro ウェブサイト：<https://metooanthro.org/>

HiF ウェブサイト：<https://safefieldwork.live-on.net/>

FENICS ウェブサイト：<https://fenics.jpn.org/>